

感情表出が受け手の行動プロセスに及ぼす影響
—感情の社会的機能に着目して—

The Effects of Emotional Expression on Others

研究代表者 野口 素子 (D3) 教員 吉川 左紀子
研究分担者 溝川 藍 (D2) 小宮 あすか (D2) 嶺本 和沙 (D2)

〔研究目的〕

人間が他者との関係を構築する上で、感情を介したコミュニケーションは欠かせない要因である。感情表出が表出者と受け手との間でどのような働きをするのか、また受け手からどのような行動や認知を引き出すかについて理解することは非常に重要である。ただし、感情表出とその社会的機能の関係は一對一に固定されたものではない。同じカテゴリの感情表出でも、表出時の状況や表出者の属性によっても異なる捉え方をされ、その働きは変化する。また感情表出の調整（誇張・抑制）も、コミュニケーションのあり方に影響を与えると考えられる。さらに後悔のような高次の感情の表出は、表出者への信頼性に影響することも示されている。感情表出は、他者に様々な形で影響し、社会的に良好な関係を構築したりコミュニケーションを円滑に運ぶ機能を持つことが示唆される。しかしながら、現在のところ、感情表出が受け手の行動プロセスに及ぼす影響に焦点を当てた実証的研究は少ない。本コロキウムでは、感情表出の社会的機能に着目し、感情表出が受け手の行動プロセスに及ぼす影響について、認知・発達・社会的観点から多角的に検討することを目的とする。

〔研究経過〕

4つの実験を通じて、人間のコミュニケーションを支える感情の役割に関する検討を行なった。実験1では、意図的に操作された感情表出が受け手の表出者に対する認知にどのような影響を与え、その後の2者関係がどのように変化するのかについて検討した。実験2では、表情表出が受け手の接近回避行動に与える影響に着目し、同じカテゴリに属する表情でも、表情表出者の年齢（乳児・大人）によって受け手の異なる接近回避行動を引き出すかについて検討を行なった。さらに実験3では、実験2より得られた知見をもとに、表情表出者の属性が対人行動だけでなく表情の知覚にも影響を及ぼしている

か否かについて検討することとした。実験4では、感情の言語的な表明が社会的文脈の中で実際にどのような他者の行動を引き出すか、その機能について、社会心理学的観点から検討した。特に、後悔の言語的表明が受け手の信頼行動に与える影響に着目し、その機能について検討した。

【研究成果】

本コロキウムでは感情表出の社会的機能に着目した4つの実験を行い、人間のコミュニケーションを支える感情の役割について多角的に検討した。実験1は、現在実施中であるが、対人場面において豊かに感情を表出することが、受け手の豊かな感情表出を引き出し、受け手との関係性を良好にすることが示されると予想される。このことは、対人場面において感情表出を意図的に操作することが、円滑で良好なコミュニケーションの形成に関わっている可能性を示唆している。実験2からは、感情表出者の年齢(乳児・大人)によって、同じカテゴリの表情が異なる対人的機能を果たすことが明らかになった。加えて、悲しみ表情は、受け手の接近的態度を導くという新たな知見が得られた。実験3は、現在分析中であるが、表情の意味を変化させる年齢という情報が表情の処理過程に及ぼす影響を明らかにすると予想される。実験4からは、表情表出だけでなく、感情の言語的表明にも、社会的関係の構築を促進する機能がある可能性が示唆された。具体的には、対人的な後悔を表明することが他者の信頼行動を引き出すことを示しており、後悔という高次の感情の表明が、関係を結ぶことを促進する機能を持つ可能性を支持するものである。

これらの研究結果は、いずれも感情表出が、対人的なコミュニケーションや良好な関係性を築くために社会的に重要な役割を果たしていることを示唆している。本コロキウムの成果は、発達・知覚・社会心理学の各分野に対して、感情表出の機能に関する新たな知見を提供するものである。

本研究は3つの研究室をまたぐプロジェクトであった。それぞれの専門領域を上手く補い合うことで、認知心理学・発達心理学・社会心理学という大きな枠組みから感情表出の機能について検討することが可能となった。その結果、個々の分野からだけでは得ることができなかったであろう成果を得ることができ、それぞれの分野をまたぐ新たな知見とさらなる課題を得たことは本研究の大きな意義であると言える。

なお、実験2と4の成果は、すでに英文国際誌に投稿・審査中である。さらに、実験4の成果は2009年12月に行われた第2回日本人間行動進化学会において発表された。その他の実験成果についても今後国内外の学術誌・学会で発表する予定である。